

2) エニシダ=金雀枝

エニシダはマメ科の落葉低木で南ヨーロッパ原産である。高さは1~2 mで枝はたわんで垂れ下がり、4月ごろ黄色の蝶形花を無数に咲かせる。和名の由来はラテン語の『*genista*』である。これは鎖国時代の延宝年間(1673~1681年)にオランダ人が長崎の出島にもたらしたもので、オランダでは「ヘニスタ」と発音するために、これが日本では「エニシダ」として伝わった。イギリスでは『*broom*』つまり「帚」のことで、これは学名『*Cytisus scoparius*』の種小辞を英訳したものである。

ヨーロッパを中心としてこのエニシダ属は数十種が分布し、欧米では庭園樹としての品種改良が盛んに行なわれている。また若葉や枝には有毒なアルカロイドである『*sparteine*』(スパルテイン)という物質が含まれ、これを煎じて解熱剤に用いる。現在でも肝臓や腎臓の薬として使われ、若いつぼみを塩漬けにしたものはケイパーと同じようにサラダに混ぜて食用とされ、ホップの代用としても用いられた。

イギリスでは1066年ノルマンジー公ウィリアム(征服王)が、ヘースティングスの戦いに勝利してイングランドを征服し、ノルマン王朝を起こした。その後現在のフランス西部にあったアンジュー公国のジョフロア伯(英語読みではジェフリー)の子ヘンリー2世が、母親マチルダの姻戚関係等により、1154年にイギリスの王位を相続し、『プランタジネット王朝』を起こした(01-03-10 マーガレットの項を参照)。彼の父ジェフリーは戦争の時には、エニシダの小枝を兜に挿して戦っていたので、プランタジネット(Plantagenets=plant + genet=将軍の植物という意味)の名前がつけられたといわれている。ヘンリー2世はその後、婚姻によりイギリスからフランスにかけて広大な領土を支配したが、1204年に失地王ジョンの時代になると領土の大半を失い、『マグナ・カルタ』の承認を強要され、王朝の権威は著しく失墜した。またノルマン王朝時代のイギリスには、多くのフランス語が流入した。例えば『*beautiful*』という英語は、美しいという意味のフランス語『*beaut*』であったし、『*charm*』という英語はフランス語の『*charme*』(シャルム=魅力ある)であった。一方アンジュー公国のフルク王子は、兄を殺して王位に着いたが、常に良心の呵責に耐えかねてエルサレムに巡礼し、毎晩エニシダの鞭で自分を打ったと伝えられている。また第3回十字軍(1147~1149年)で勇名を馳せた『リチャード獅子心王』は、エニシダの紋章を玉璽に彫り込んだ。以来これは英国の国章と見なされている。

イギリスではエニシダの枝を束ねて帚(*broom*)として用いるが、古い物語に登場する魔女は、この帚の柄にまたがって空を飛ぶものと信じられていた。これはイエスと聖母マリアがヘロデ王に追われているとき、茂みのエニシダがさらさらと音を立てて2人が隠れているのを知らせたため、エニシダは帚にされたといわれている。ヨークシャーでは結婚前の若い娘がこの帚の柄を跨ぐと、私生児を生むといわれている。これは伝統ある英国のある種の躰と見ることができようか。



鮮やかな黄色が美しいエニシダ。春を代表する黄色の花の一つである。



紅花や白花もある。



このエニシダはヒメエニシダといわれているもので、植木鉢やポットで栽培されることが多い。また路地植えしても1m程度にしかならない。

[目次に戻る](#)



公園で咲いていたエニシダ。シロバナを探していたが残念ながらこれも黄花だった。

[この他のエニシダ工事中](#)

[目次に戻る](#)

